

潜在的・顕在的自尊心の高低と抑うつとの関連について

片 受 靖 (立正大学心理学部)

濱 洋 子 (渋谷区教育委員会)

Correlations between the level of implicit/explicit self-esteem and depression

Yasushi KATAUKE (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Youko HAMA (*Shibuya Ward Educational Board*)

Abstract

In this study, we have studied the correlations between the level of implicit self-esteem and depression. An experimental survey using a paper and pencil version of the Implicit Association Test (IAT) and a questionnaire were conducted against college students. The questionnaire included the Explicit Self-Esteem Scale, Self-Rating Depression Scale (SDS), and depression scales such as Subjective Adjustment Scale for Adolescents, Self-Oriented Perfectionism Scale, and Subjective Well-Being Scale. The results of the surveys were analyzed from the perspectives of gender and grade differences as well as the level of implicit and explicit self-esteem. From the assessment of the survey results, we have evolved the following hypothesis: (1) Implicit and explicit self-esteem are independent and not correlated. (2) When the levels of implicit and explicit self-esteem are inconsistent, the depression level would be higher than when they are consistent. Previous studies have reported that when the levels of implicit and explicit self-esteem are inconsistent, people are motivated to solve the inconsistency. The development of social maladjustment was expected as a consequence. The results supported Hypothesis (1) whereas Hypothesis (2) was not proven to be true. This result might have been caused by the issue in the survey control (experimental survey method, participants, and research designs). People with high self-esteem had lower depression, were more adaptive, and had higher well-being compared to those with low self-esteem. These results supported the previous studies related to explicit self-esteem. The reason why Hypothesis (2) was not supported may be because of the difficulty of precise measurement and detailed observation of the psychological adjustment in the case of depression with the researches focused only on explicit self-esteem using self-administered questionnaires.

Key words : Paper-and-pencil AIT, implicit self-esteem, explicit self-esteem

【問題と目的】

現在、うつ病の有病率の高さが指摘されており、自殺や企業がもたらす社会的損失の問題などから、抑うつ状態発生に関連する要因や発生機序等は心理学の分野において取り組むべき重要な研究対象と考えられている。人が抑うつにいたる要因としては諸説が考えられ一般化することは不可能であるが、抑うつと関連する心理的要因の1つとして、自尊心が考えられている。

抑うつと自尊心は、概念としては別々と考えられるが、関連は大きく (Watson & Clark, 1984)、自己評価の低さが抑うつの執拗な症状 (Beck, 1976) とされた

り、自尊心が気分障害における診断基準の1つとして用いられている (American Psychiatric Associate, 2000)。抑うつに関連性が深いとされる自尊心に注目すると、抑うつと自尊心に関する知見は、自尊心が低い者が抑うつの度合いが高いという結果が大半を占めているが、近年、必ずしも自尊心が低い者が抑うつの度合いが高いとは限らないという従来とは相反する報告がなされており、矛盾を呈している状況であると考えられている (原島・小口, 2007)。さらに、従来の自尊心と精神的適応に関する研究は、自己記入式質問紙で測定された顕在的自尊心を用いた検証が主であり、IAT (紙に印刷された刺激語を制限時間内にできるだけ多く

分類することによって、潜在的自尊心を測定する方法)において測定される潜在的自尊心に言及した研究は、圧倒的に少ない。Greenwald & Banaji (1995) は潜在的自尊心を「内省的に識別できない (または正確に識別できない) 自己に連合した、あるいは自己に連合していない対象に対する評価に基づく自己への態度」と定義した。さらに、これまでの先行研究からは、潜在的自尊心と顕在的自尊心とは、一般的にはほぼ無関連であることが報告されている (Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000; 潮村・村上・小林, 2003)。さらに、潜在的自尊心と顕在的自尊心の高低による不一致と、精神的不適応の関連についての研究はほとんど見受けられない。従来の知見が矛盾を呈している要因の一つとして、潜在的自尊心と顕在的自尊心の不一致の状況が影響していると考えられよう。顕在的自尊心と潜在的自尊心と抑うつとの関連を検証することは、抑うつの予防への有効なアプローチであると言えよう。

そこで本研究では、抑うつをもたらす心理的要因の一つとして潜在的自尊心と顕在的自尊心に焦点をあてて、潜在的・顕在的自尊心の高低の不一致が抑うつにどのような関連があるのかを検証することを目的とする。その際には、どのような抑うつを対象とし、どのような方法で測定するかについて、その測定方法の限界とともに十分に留意する必要があると考えられる。本研究における研究対象、選択尺度について以下に示す。

研究対象者

本研究におけるうつ状態とは、軽度のうつ状態を示す「抑うつ」(以下、抑うつ)を対象とする。また、調査対象としては、10代後半から20代前半の年齢層である大学生を取り上げて検証する。川上 (2003) の報告では、10代後半から20代前半にかけては、他の年齢層に比べて抑うつの危険性が高いことが実証されている。さらに、近年、大学では、学生の不適応に対する関心が高まっている。及川・坂本 (2008) は、大学全入時代と称される現在において、学力面での適応困難とともに、人間関係や社会生活における適応困難の問題の増加を指摘し、前者だけではなく後者への対応も必要であると指摘している。大学生の時期は、環境の変化に伴うストレスやアイデンティティの確立という発達課題を抱え、抑うつを経験することも多い (西川・坂本, 2005)。抑うつ傾向を示す学生の多さを踏まえて、治療対象とはならないまでも、多少の困難を抱えながらも学生生活を送っている者も少なくないとされる (白石, 2005)。

抑うつの研究において、臨床的なクライアントではない大学生などを対象とする研究は、アナログ研究と

呼ばれる (Newell & Drydrn, 1991)。アナログ研究は、条件統制しやすいこと、多人数を対象にできること、統計的な処理が容易になることなどの利点がある (Newell & Drydrn, 1991)。また、抑うつ研究に学生群を用いる方法論的長所として、比較的均質な環境に置かれていること、学生群は精神疾患に罹患している確率が少ないこと、薬物治療による影響を受けている者が少ないことなどがあげられている (Vrendenburg, Flett, & Krames, 1993)。

大学生を対象としたアナログ研究は、以上のような方法論的利点がある一方で、大学生の抑うつと臨床群の抑うつが連続的であるかについては議論が分かれる。Ruscio & Ruscio (2002) は、新しい統計手法によって、大学生の軽度の抑うつから重症度への連続性を実証した。同様の手法において、坂本・奥村・大野 (2005) や、奥村・坂本 (2009) も、抑うつの自己記入尺度を用いて、抑うつの連続性に関する統計的検討において、その連続性が支持されることを実証した。よって、本研究は、軽度の抑うつ状態を対象としながらも、抑うつからうつ病への連続性において、うつ病の実証的研究となりうると推定される。

尺度選択について

同じようなストレス場面を体験しても、抑うつ感をどの程度感じるかは、個人差が大きいと考えるのが妥当であろう。抑うつを検討する際に、抑うつ尺度だけで得られた知見では、抑うつに特異的にあてはまる知見であることを検証することはできない。このことを防ぐために、関連が予想される他の自己記入式尺度を同時に実施し、統計的な処理によって検討する必要がある。

抑うつに影響する要因としては、性格要因として完全主義的な傾向やメランコリー親和型性格、執着気質等がある。その中の1つである完全主義は抑うつと正の相関関係を示すことは臨床的によく見られる事実である (Hewitt & Flett, 1991)。しかし、実は完全主義尺度と抑うつなどの精神的適応を測る尺度の関連は、一部においては見出されにくいとする報告もなされている (大谷・桜井, 1995; 東, 2007)。そこで、抑うつの測定と同時に完全主義を測る尺度を採用することで、性格要因との関連が可能になるとともに、先行研究の知見の検証も兼ねることができると考えられる。

さらに、自尊心の高さと変動性の先行研究において、自尊心の2側面と主観的幸福感との関連を検討されている (Paradise & Kernis, 2002)。自尊感情が安定している者よりも、低く不安定である者の方が、主観的幸福感が高いことが明らかになっている。すなわち、高い自尊感情においては、不安定である者よりも安定し

ている者の方が、心理的に適応的であり、低い自尊心においては、安定している者よりも不安定である者の方が、心理的に適応的であることが明らかになっている。同程度の自尊心の高さであっても、自尊心の変動性（安定しているか否か）によって、精神的適応が異なるのである。精神的適応と関連が深いとされる主観的幸福感尺度も同時に用いることで、精神的適応への重層的な検証が可能になると想定する。

仮説

本研究においては、潜在的自尊心と顕在的自尊心の不一致の存在を仮定して、抑うつとの関連を検証することを目的とし、以下の仮説を立てた。

仮説（1）

潜在的自尊心と顕在的自尊心は独立しており、無相関である。

具体的には、実験調査である紙筆版 IAT で測定された潜在的自尊心と、自己記入式質問紙調査で測定された顕在的自尊心の相関関係を検証する。両者が無相関の関係であることは、両者が意味する内容が異なることが示唆される。よって、両者の高低の組み合わせを分析することの意義が保証されることになる。

仮説（2）

潜在的自尊心と顕在的自尊心の高低が不一致な場合は、一致する場合よりも抑うつ度が高くなる傾向がある。

具体的には、潜在的自尊心の特徴と顕在的自尊心の特徴から、それぞれの平均値を中心として高得点群・平均得点群・低得点群のグループに分類する。潜在的自尊心高－顕在的自尊心高＝HH 群、潜在的自尊心高－顕在的自尊心低＝HL 群、潜在的自尊心低－顕在的自尊心低＝LL 群の 4 群を設定する。4 群と抑うつとの度合いや他の尺度との関係を一元配置の分散分析を用いて、4 群の比較検討を実施する。

【方法】

1. 調査対象者

都内私立大学の R 大学の学生を対象とした。319 名に対して調査を実施した。調査にあたっては倫理面に十分に配慮し、回答は統計的に処理され個人のデータが特定されることはないこと、回答は任意であり、回答しない場合でも何ら不利な取扱を受けることはないこと等を説明し、調査を実施した。調査の結果、回答漏れのあるもの、回答内容が不適切である者などを除外し、303 名（男性 89 名、女性 214 名、平均年齢 20.1 歳、 $SD=4.32$ ）を有効データとしたが、その後の分析の結果、紙筆版 IAT の誤反応率 20% 以上の者を除いたた

め、最終的な有効データは、263 名（男性 72 名、女性 191 名、平均年齢 19.9 歳、 $SD=4.01$ ）となった。

2. 調査時期

2012 年 7 月に講義時間中に実施した。

3. 質問紙

1) 紙筆版 IAT

潜在的自尊心を測定するために使用した。

紙筆版 IAT の刺激語は、藤井・上淵（2010）に準じて作成した。実施については、他の調査とは別に紙筆版 IAT を測定する冊子を作成して使用し、調査対象者には言葉の分類課題の実験であると説明した。実施要領は、調査者の合図に基づいて各ページの課題を行い、実施方法としては、ページ中央に並んだ刺激語が、左右の上部に記されている概念のどちらに属するのかを判断して、該当する括弧に印をつけるように教示し、対象者が回答をするものである。

2) 顕在的自尊心尺度

Rosenberg（1955）によって作成され、山本・松井・山城（1982）によって日本語に翻訳された日本語版自尊感情尺度を使用した。

3) 青年用適応感尺度

大久保（2005）によって作成された青年用適応感尺度を使用した。

4) 自己志向的完全主義尺度

桜井・大谷（1997）の自己志向的完全主義尺度を使用した。

5) 主観的幸福感尺度

伊藤・相良・池田・川浦（2003）が作成した主観的幸福感尺度を使用した。

6) 抑うつ度を測定する尺度

Zung（1965）が作成した SDS（Selfrating Depression Scale）の日本語版を使用した。

【結果と考察】

1. 顕在的自尊心の得点化への配慮

顕在的自尊心の得点化においては、伊藤・小玉（2005）と同様に因子負荷量が極端に低い項目番号 8 を除外し、9 項目の合計得点を顕在的自尊心得点とした。多くの先行研究（谷，2001；佐久間・無藤 2003；田中・上地・市村，2003）では、内的整合性の観点より、10 項目よりも項目番号 8 を除去した 9 項目による測定法が、高い内的一貫性を有することが確認されている。

2. 記述統計量と各尺度の相関関係

記述統計量は Table 1 に示されている。各尺度のすべての項目において天井効果およびフロア効果は認められなかった。各尺度の相関関係を Table 2 に示した。SDS と青年用適応感尺度、主観的幸福感尺度、顕在的

Table 1 記述統計量 (N=263)

	最小値	最大値	M	SD
適応感尺度	43	125	98.75	15.75
完全主義尺度	24	114	73.75	14.63
主観的幸福感尺度	15	48	32.59	5.79
SDS	24	73	44.62	8.63
顕在的自尊心	9	45	26.69	7.55
潜在的自尊心	-9.0	15.5	5.02	4.38

Table 2 各尺度の相関関係

	適応感尺度	完全主義尺度	主観的幸福感尺度	SDS	顕在的自尊心
完全主義尺度	-.24**				
主観的幸福感尺度	.74**	-.25**			
SDS	-.68**	.31**	-.70**		
顕在的自尊心	.60**	-.22**	.73**	-.69**	
潜在的自尊心	.05	.06	.03	-.08	.08

** $p < .01$

自尊心との間に1%水準で有意な負の相関が得られた。また、SDSと完全主義尺度との間に1%水準で有意な正の相関が得られた。

顕在的自尊心と青年用適応感尺度、主観的幸福感尺度との間には1%水準で有意な正の相関が見られた。

また、青年用適応感尺度と完全主義尺度、主観的幸福感尺度との間に1%水準で有意な負の相関、青年用適応感尺度と主観的幸福感尺度との間に1%水準で有意な正の相関が得られた。潜在的自尊心と各尺度の間には、有意な相関関係は見られなかった。また、潜在的自尊心と顕在的自尊心の間にも有意な相関関係は見られなかった。したがって、本研究における仮説1は支持されたとと言える。

これらのことから、本研究の調査対象者は、大学生生活における対人関係を含む周囲の環境への適応感が増すと、抑うつは低くなり、顕在的自尊心は高くなると言える。同様に主観的な幸福感が増すと、抑うつは低くなり、顕在的自尊心は高くなると考えられる。この結果は、顕在的自尊心の高い者は低い者と比べて抑うつが低く、適応的であり、主観的幸福感が高いという先行研究を実証するものとなった。また、自分に高い目標を課す傾向が強まると、抑うつが高くなり、顕在的自尊心も高くなる。さらに失敗を過度に気にしたり、自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向が強くなると、抑うつは高くなり顕在的自尊心は低くなると言える。

今回の調査では潜在的自尊心と他の尺度との関連性は実証できなかった。潜在的自尊心とSDS以外の各尺度と何らかの関連があればIATで測定される潜在的自尊心は具体的にどのような事項を測定しているのかということが解明できたと考えられる。

3. 男女差の検討

各尺度の得点における性差の検討を行った。結果はTable 3に示されている。t検定を実施したところ、適応感尺度 ($t(261)=3.49, P<.005$)、幸福感尺度 ($t(261)=3.49, P<.001$) において男子学生より女子学生の方が有意に高い得点を示した。今回の調査において女子学生は男子学生よりも大学生生活に居心地の良さを感じ、将来の目標を持ち、充実していると感じている。また、親密な対人関係を構築し、信頼され、受け入れられているという感覚を持ち、人生を前向きに捉え、達成感を感じていると言える。

有意な結果ではなかったが、潜在的自尊心の得点は男子学生の方が高く、顕在的自尊心の得点は男女ではほぼ同じ得点であった。顕在的自尊心得点は、女性よりも男性において高いという報告がある(桜井, 1992)が、本調査では潜在的自尊心得点の方が女性より男性の方が高くなった。男子学生は、女子学生と比較すると、潜在的自尊心と顕在的自尊心のバランスが悪いとも言える。そのため、男子学生よりもバランスが良いと推定される女子学生の方が適応感尺度や主観的幸福

Table 3 男女別の平均値とSDおよびt検定の結果

	男性 (N=72)		女性 (N=191)		t 値
	M	SD	M	SD	
適応感尺度	93.33	18.89	100.79	13.96	3.49**
完全主義尺度	74.79	15.66	73.36	14.25	.68
主観的幸福感尺度	30.78	6.93	33.27	5.15	3.16**
SDS	45.28	9.09	44.37	8.46	.74
顕在的自尊心	6.67	8.29	26.70	7.27	.03
潜在的自尊心	5.49	4.52	4.84	4.33	1.05

** $p < .01$

Table 4 4群の平均値とSDおよびF値

	HH 群 (N=41)		HL 群 (N=35)		LH 群 (N=28)		LL 群 (N=41)		F 値 df=2260
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	適応感尺度	109.76	18.17	84.80	21.27	108.75	19.20	84.90	13.11
完全主義尺度	72.49	15.93	79.00	15.06	68.89	12.10	74.95	15.59	2.59
主観的幸福感尺度	36.07	3.57	28.26	5.27	37.96	4.67	28.46	4.63	43.04***
SDS	38.90	7.12	50.26	6.79	38.18	7.86	50.46	8.23	29.54***

*** $p < .001$

感尺度の得点が高かったとも考えられる。

4. 4群に分類しての検討

潜在的自尊心得点と顕在的自尊心得点の間には、有意な相関関係は見られなかった。そこで、潜在的自尊心得点と顕在的自尊心得点のそれぞれにおいて、平均点より0.25SD以上高い群と、0.25SD以上低い群に分割を行った。その結果、潜在的自尊心高-顕在的自尊心高=HH群、潜在的自尊心高-顕在的自尊心低=HL群、潜在的自尊心低-顕在的自尊心高=LH群、潜在的自尊心低-顕在的自尊心低=LL群が設定された。4群間を対象とした一元配置の分散分析を実施した。結果はTable 4に示されている。有意な結果が得られたので、HSD法による多重比較を行ったところ、適応感尺度においては、HH群はHL群とLL群より高く、HL群はLH群より低く、LH群はLL群より高いという結果を示した。主観的幸福感尺度では、HH群はHL群とLL群より高く、HL群はLH群より低く、LH群はLL群より高いという結果が得られた。SDSにおいては、HH群はHL群とLL群より低く、HL群はLH群より高く、LH群はLL群より低いという結果を示した。

本研究の仮説2として、潜在的自尊心と顕在的自尊心の高低が不一致な場合は、一致する場合よりも抑うつ

つ度が高くなる傾向があると想定したが、有意な差異は確認されず、結果的には仮説2は支持されなかったと言える。仮説2から想定される結果として、HL群のSDS得点はLL群より低くなるであろうというものであったが、それぞれの数値はLL群=50.46に対して、HL群=50.26であり、LL群の得点の方がやや高いという結果になった。

他の尺度において、HL群の得点がLL群より低いのは適応感尺度、主観的幸福感尺度であり、2つの数値とも差異に対して有意な結果は得られなかったが、潜在的自尊心と顕在的自尊心の不一致がもたらした結果であると推測される。潜在的自尊心が高く顕在的自尊心が低い場合は、その不一致を解消しようとして、それぞれの尺度の得点が低くなるのかもしれない。

[全体的考察]

まず、仮説1について考察する。本研究では、先行研究が示すように潜在的自尊心と顕在的自尊心の間に有意な相関は見られず、潜在的自尊心と顕在的自尊心は、異なるものであることが示唆された。本研究においては仮説1は支持された。

IATは、回答者が内観することができない、すなわち意識することのできない傾向や性質を測定するとされている。そこで、自己記入式質問紙法では測定でき

ない潜在的特徴とは何であるかが問われてくる。尾崎(2006)によると顕在的態度は言語的行動のような意識的な行動に大きく影響を与えており、一方で潜在的態度は非言語的行動のように無意図的で非意識的な行動に強く影響すると考えられている。行動的な側面を加味した実験調査を実施することで、潜在的自尊心の詳細な概要が明確になるかもしれない。潜在的自尊心に関しては、その解釈や形成過程など、まだ明確でない部分が多いとされている(小塩・西野・速水, 2009)。IATで測定される潜在的自尊心と顕在的自尊心の関連は、今後も継続して検討していく必要がある。

次に仮説2について考察する。本研究において、先行研究における問題点の理論的説明を試みたが、仮説は支持されなかった。支持されなかった要因としては、調査方法、調査対象者、研究デザインなどに問題があった可能性が考えられる。

顕在的自尊心研究の現在までの知見において、自尊心と心理的適応との関連は、高い自尊心が常に望ましい結果をもたらすわけではないという、一見すると矛盾した結果を呈していたり、自尊心が高くても、安定しているか否かによって、自尊心の肯定的側面と否定的側面の発現が異なることが実証されている。これらは、潜在的自尊心と顕在的自尊心の高低の不一致から説明が可能になると考えられる。人はこの不一致状態を解消しようとして動機づけられることによって、何らかの行動や思考が発現し、精神的適応に影響を及ぼすと考えられる。

潮村(2008)が指摘するように、潜在的な態度と顕在的な態度の間で不一致、すなわち低い相関が示されるのは、「エイジズム」「人種の態度」「性別ステレオタイプ」など、一般的には自身の態度を直接的に表出されることがはばかれるテーマである。「自尊心」というテーマも、社会的望ましさの影響が考えられるため、ほぼ相関がない可能性も考えられる。しかし、潜在的な態度と顕在的な態度の間で不一致が生じるテーマは、どのようなものであるかを特定していくことは、その不一致に対してどのように対処していくかにつながっていくと想定される。潜在的自尊心と顕在的自尊心の不一致は、抑うつをもたらす要因の一つとして、今後のさらなる検討が期待される。

[今後の課題と展望]

1. 実験調査の改善点

実験調査は、細心の注意を払って実験の条件を可能な限り統制して、得られる結果の精度を高めることが重要である。本研究の実験調査は、紙筆版 IAT による潜在的自尊心との測定であった。紙筆版 IAT は、単語の分類課題として実施されるが、限られた時間内でど

れだけ分類可能かで潜在的自尊心得点が左右される。実施においては、実施時間帯、実施環境(講義教室の環境、受講人数)を可能な限り統制すべきであった。

5回の講義にわたって実験調査を実施したうち、4回は午前中の講義であったが、1回は夕方の講義となった。また、講義教室の環境としては、実験調査の性質上、個々が集中して分類課題に取り組むためには、隣が気にならないある程度余裕があり、雑音の少ない教室で、実験調査の教示に対するすべての人が理解可能な広さが望ましい。大教室ではなく、50人程度が収容可能な教室が適当であったが、1回のみ100人以上が出席している大教室で実施した。本研究のすべての実験調査が午前中かつ50人程度収容の教室で実施されていたら、潜在的自尊心の結果はより精緻なデータとなり得たと予想される。

2. 調査対象者の問題

本研究は大学生を対象としたアナログ研究であることから、本研究で得られた知見が、その他の対象者に一般化できるかどうかということについては今後の検討課題である。さらに調査対象者として単一大学・単一学部の大学生を選択したため、アナログ研究の対象としても偏りが生じてしまったことは否めない。複数大学複数学部の大学生を対象として、アナログ研究の精度を高めることで、より精緻な仮説の検証が実現できる可能性がある。

3. 縦断的視点を加味した研究への発展

本研究は大学1年生から4年生までの学年をまたいだ横断的な調査であり一時点での測定結果であると言える。本研究においては、自尊心を安定した特性的概念として位置づけたという限界がある。縦断的視点を加味して、自尊心の変動性、脆弱性をも検討する研究デザインを考える必要があったと考えられる。具体的には、入学・進学して環境が変わる5月の調査をTime 1とし、半年経過した10月にTime 2として調査を実施し、潜在的・顕在的自尊心の結果の高低の不一致を検証するというデザインである。縦断的視点を加えることによって、精緻化した検証が可能になったと考えられる。

引用文献

American Psychiatric Association 2000 Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR Washington, DC: American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染谷俊之(訳) 2003 DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き 新訂版. 医学書院)

- Beck, A.T. 1976 *Cognitive Therapy and The Emotional Disorders*. New York: International University Press.
- Bosson, J.K., Swann, W.B., & Pennebaker, J.W. 2000 Stalking The perfect measure of implicit self-esteem: The Blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 631-643.
- 藤井勉・上淵寿 2010 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定を試み 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, **61**, 113-120
- Greenwald, A.G., & Banaji, M.R., 1995 Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- 原島雅之・小口孝司 2007 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究 **47**(1), 69-77.
- Hewitt, P.L., & Flett, G.L. 1991 Perfectionism in the Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456-470.
- 東真由美 2007 完全主義と不適応の関連 京都教育大学教育実践研究紀要, 第7号, 111-119.
- 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, **54**, 222-232.
- 伊藤裕子・相良順子・池田昌子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 276-281.
- 川上憲人 2003 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 平成14年度厚生労働科学研究費補助金心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究総括 研究報告書.
- Nwewll, R. & Dryden, W. 1991 Clinical problems: An introduction to the cognitive behavioural approach. In W. Dryden & R. Rentoul (Eds.), *Adult Clinical Problems: A cognitive-behavioral approach*. London: Routledge. (丹野善彦訳 認知行動アプローチの基礎理論(丹野善彦監訳 1966 認知臨床心理学入門) 東京大学出版会 pp. 9-54)
- 西河正行・坂本真士 2005 大学における予防の実践・研究 坂本真士・丹野善彦・大野裕(編)抑うつの臨床心理学 東京大学出版会 pp. 213-236.
- 及川恵・坂本真士 2008 大学生の精神的適応に対する予防的アプローチ 京都大学高等教育研究第14号, 145-146.
- 奥村康之・坂本真士 2009 抑うつの連続性議論—より質の高い研究に向けての提言—心理学評論, **52**(4), 504-518.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—教育心理学研究, **53**, 307-319.
- 尾崎由佳 2006 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学, **45**(2) 98-110.
- 小塩真司・西野拓郎・速水敏彦 2009 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, **17**(3), 250-260.
- 大谷佳子・桜井茂男 1995 自己志向の完全主義の2側面と自己評価の抑うつ傾向の関連の検討—統制不可能事態への対処を媒介として— 心理学研究, **75**, 199-206.
- Paradise, A.W., & Kernis, M.H. 2002 Self-esteem and Psychological well-being: Implication of fragile self-esteem. *Journal of social and Clinical Psychology*, **21**, 345-361.
- Rosenberg, M. 1965 *Social and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Ruscio, A.M., & Ruscio, J. 2002 The latent structure of analogue depression: Should the Beck Depression Inventory be used to classify groups? *Psychological Assessment*, **14**, 135-145.
- 坂本真士・奥村康之・大野裕 2005 うつの自己記入式尺度を用いた連続性に関する統計的検討: taxometric analysis を用いて 日本うつ病学会第2回総会プログラム抄録集, **56**.
- 佐久間路子・無藤隆 2003 大学生における関係の自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33-42.
- 桜井茂男・大谷佳子 1992 自己評価維持モデルに及ぼす個人差要因の影響 心理学研究, **63**, 16-22.
- 桜井茂男・大谷佳子 1997 “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.
- 潮村公弘 2008 潜在的自己意識の測定値とその有効性 下斗米淳(編)自己心理学6 金子書房 pp.48-62.
- 潮村公弘・村上史朗・小林和博 2003 潜在的社会的認知研究の認知-IATへの招待 信州大学人文科学論集 人間情報科学編 **37** 65-84
- 白石智 2005 大学生の抑うつ傾向に対する心理的介入の実践研究—認知療法による抑うつ感軽減・予防プログラムに関する一考察 教育心理学研究, **53**, 252-262.
- 田中道弘・上地勝・市村國 2003 Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討 茨城大学教育学部紀要(教育学), **52**, 115-126.

- 谷冬 2001 青年期における同一性の感覚の構造－多次元的自我同一性尺度 (MEIS) の作成 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- Vrendenbburg,K., Flett,G.L., & Krames,L. 1993 Analogue versus clinical depression: A critical reappraisal. *Psychological Bulletin*, **113**, 327-344.
- 山本真理子・松井豊・山城由紀 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- Watson,D., & Clark,L.A. 1984 Negative affectivity: The disposition to experience aversive emotional states. *Psychological Bulletin*, **96**, 465-490.
- Zung,W.K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

要 約

本研究は、大学生を対象として紙筆版 IAT の実験調査と、質問紙調査を実施した。仮説 1 として「潜在的自尊心と顕在的自尊心は独立しており、無相関である」、仮説 2 として「潜在的自尊心と顕在的自尊心の高低が不一致な場合は、一致する場合よりも抑うつ度が高くなる傾向がある」という 2 点の仮説を立てて検証した。分析の結果、仮説 1 は支持されたが、仮説 2 は支持されなかった。その要因については、調査対象者の問題等が考えられた。

キーワード：紙筆版 IAT、潜在的自尊心、顕在的自尊心